インターフェースとしての日本事情

Nihonjijo as an Interface

奥　村　訓　代

1　はじめに
2　教育の国際化
3　授業の特色
4　成果と問題点
5　まとめ

キーワード：教育の国際化、留学生用日本事情からの脱皮、経験の共有、理解から創造へ、
インターフェースとしての授業

1　はじめに

大学教育改革の柱として「教育の国際化」が一つのキーワードになっている。これは、知識として国際的マナーを習得することや教育レベルの国際的水準への高揚にとどまらず経験の共有をも意味している。この「経験の共有」こそが本研究のキーワードの１つをなしている。今、教育に求められているのは、来るべき国際社会生活における知的適応のみならず実生活における円滑さへの適応なのである。

従来からインターフェース[注1]としての留学生効果は話題の一つとされてきたが、その多くは留学生という縛りにおいて別枠扱いされ、単に客寄せパンダ的存在あるいは宣伝効果を高めるためのアルバイト要員として存在し、待遇的にはむしろ異質なものとしての色眼鏡で見られており、本来の機能として期待される異文化への誘い、接触、理解のための起爆剤や動機付けといった役割を十分発揮することなく過去30年間推し進められてきた。

その原因を探ってみると、インターフェースとしての各種試みのほとんどが課外活動や交流という枠を超えなかったからである。例えば、パーティ、サークル、チューター、その他支援活動のほとんどが学習効果や教育的配慮に基づいているとはいえ、非直接的な存在でしかなかった。つまり長い間、今求められているような「インターフェースとしての授業」の中での留学生教育が存在しなかったことになる。

箕浦康子氏は「留学交流」の中で『留学生と日本人が同じ場と時間を共有することは相互交渉の前提条件であり、相互理解は意味ある活動が共同でなされ、そこに葛藤と成就感などの情動を伴った経験を経て初めて成立する』とまとめている。

つまり従来型の非直接的なインターフェース（課外活動や交流中心）を直接的（より意図的）に授業に取り入れることによりキャンパス内における国際化、あるいは本当の意味

の大学教育の国際化を図らなければならないというのが本稿の主旨である。

今こそ、大学改革という荒波の中で、最も近場にいる日本事情教育あるいは留学生関連教育こそが「教育の国際化」を大いに掲げるときであると考えたい。

2　教育の国際化

喜多村和之氏は、大学の国際化の要因として次のようなものをあげている。「大学の研究・方法において、異質な文化の摂取の比較、ないしはそれとの対決を必須のものとしている。外国語の習得、外国人教師や外国人留学生の存在、外国図書の輸入、洋書を収容する図書館の存在は、異質な思想や文化との接触を、他のいかなる諸機関においてよりもいっそう容易にしている。さらに大学における学問の自由の雰囲気は、異質な文化に対して大学を開放的にするであろう。」(大学の国際化より)。

つまり、喜多村氏によると大学とは実に国際化しやすい場所であり、国際化により、よりいっそう開けた大学へと発展するところだそうである。もちろん喜多村氏の指摘する国際化の要因の中に、外国人留学生・教員、日本語教育問題もピックアップされている。

昭和37年（1962年、大学設置基準の一部を改正する省令第21号）に日本語・日本事情教育が発足して以来、留学生教育と日本人学生の教育とは別々のものとして認識・発達してきた。しかし、現在の教育改善の時代を迎え、また同時に教育の国際化を考えるとき、留学生対日本人という枠組みや構造には大きな疑問を感じずにはいられない。むしろ、この区別こそが「教育の国際化」を妨げるものと考えられる。

平成３年７月に制定された新しい大学設置基準以降、多くの大学で一般教育における「日本事情」クラスが「異文化理解」クラスあるいは「多文化共生」クラスとしてリニューアルしている。

その背景にあるのは、日本における留学生事情が昭和37年当時と大きく変化していること、および大学教育自体の方向性に変化がでてきた点が上げられる。例えば、学部留学生には日本語能力試験１級が課せられていること、留学生10万人計画に基づく体制の充実が図られたこと（日本語・日本事情教官および日本語専門教育教官の配置、日本語教員養成課程と大学院、30以上の大学に留学生センター設置など)、一方で従来の教養教育が転換期を迎えたこと、経済的要因に絡む外国人の増加、インターネットによる世界的接触の簡便化など数え上げれば切りがない。

本研究では大学の、特に授業における国際化とは如何なるものかを研究テーマとし、まず最初に「教育の国際化」には何が必要なのか。そもそも「教育の国際化」とは何なのか。また、「教育の国際化」を実現する上で、基本的に重要なことは何かを考えてみる。

授業における国際化のための４Ｗ１Ｈとは：

いつ：大学の４年ないし６年間を通じて

どこで：共通教育クラスおよび専門教育クラスで（授業で）
誰が：日本語・日本事情教官が
誰に：日本人学生および外国人留学生に
何を：（討論やゲーム、共同作業を通じて）互いの異なる概念や経験を
どうする：共有させる

言いかえると、それは以下のような要件を満たしていなければならない。
1）先ず、授業の中で行われる必要性があること。（教育としての位置付け）
2）異文化に接することにより自文化を実感する。
3）日本人学生と外国人留学生が何事にもイーブンな関係にあること。
4）知識や理論だけでなく互いの経験をすぐにフィードバックできること。
5）多文化共生を肌で感じられること。

つまるところ、いかに教育（授業）における「経験共有の場」の提供が上手くできるかに「教育の国際化」の運命が委ねられているといえる。以下に高知大学で行っている「日本語・日本事情教育における教育の国際化」への試みをまとめてみる。

3　日本事情科目のインターフェース化

3－1　背景

高知大学では、平成７年以降100人以上の留学生が在籍している。その間に、留学生相談室ができ非常勤ではあるが留学生カウンセラーがつき、日本語・日本事情教官と専門教育教官が各１名づつ付いてきた。少しづつではあるがこのように、眼に見える形で国際交流の輪や留学生環境が整いつつあるといえる。大学案内を見れば、キャンパスで楽しそうに留学生や外国人教官と談笑する日本人学生達が必ず目に付く。しかし、現実には４年の在籍期間中、留学生と友情をはぐくむどころか、クラスにいても言葉さえ交わすことなく卒業する日本人学生の多さや、日本人の友達を欲しいと願いながら結局本当の友達[注2]が得られなかったといいながら卒業していく留学生が多いのに驚かされる。

学生のサークルもできた。しかし、どうも偏りがある。参加する学生は日本人サイドも留学生サイドもいつも顔ぶれが決まっており、留学生ですら全員が参加することはない。それは参加が自由であるというサークル本来のメリットでもあり、また宿命でもある。両者ともに参加自由なはずなのに、組織としては時間的・場所的拘束が要求されるというアンバランスに不快感を抱きながら、しかしあくまでも各自が自分のベストなタイミングで交流を希望、あるいは主張するのである。このいわゆるわがままな（よく言えば自己主張のはっきりした）言動を左右する主要因の一つにアルバイトがあげられる。最近の学生は、

国籍を問わずあまりにもアルバイト中心主義なのである。（極論や過言が許されるなら、選択する授業科目、社会的事業への参加すらアルバイトに左右されているのを見聞きするとき、少なからずことの大きさに驚かされる。）学生とは何か。学問とは何か。留学とは何か。という素朴な疑問だけが残る。

3－2　留学生教育だからできること

「教育の国際化」に向けては、多方面からのアプローチと解決方法があるのは前述のごとくである。そこで日本語教育や国際交流という視点から可能な「教育の国際化」を考えてみたい。

一見、留学生教育は、それ自体が国際的な教育で、そのまま国際化に貢献しているようにも見受けられるが、内部的には決してそうではない。例えば、高知大学の場合、4000人の日本人学生に対し外国人留学生は100人足らずである。日本語教育や日本語を通して日本文化や日本人を語るわけだが、果たしてその波及効果は疑問である。また、既設のサークルに参加している留学生も非常に限られ（特に欧米人に偏る）、かといって留学生が主導権を持って運営する留学生会なるものもない。単発的なパーティや交流会が持たれてはいるものの、全て一過性のものにすぎない。つまり、大学のキャンパスに留学生がいれば「教育の国際化」が行われていると考えるのはあまりにも単純過ぎるし、また、学生同士はクラスや学年、専攻を超えて自然に交流を行うものであると考えるのも期待が大きすぎる。チューターも軌道に乗るまでの指導には、かなりの忍耐と努力と時間が必要であることも周知のことであろう。

教師の課題として、従来からチューター運営をはじめとする日本人学生と留学生との交流の場の提供が大きな課題であった。しかし、チュータークラブを作ったり、日本語教育研究会を作ったり、また、共同で語劇際に参加しても根本的な解決にはならず、どこかで不満と精神的、肉体的疲労が鬱積していたのも確かであった。

それらすべての元凶がボランティアとか善意で行ってきた活動にあると気づいた。なぜなら、そこには誰でもが主張できる権利と環境があるからだ。むしろそのような曖昧性を排除する方法こそが、必要不可欠な要素であると気づいたのは最近のことである。そこで、どの学生も参加することに意義を感じ、権利の主張、自由な発言のできる環境とは何か。どのようにすればそのような環境が提供できるのかが、教師にとっての新しい課題となった。

3－3　留学生用科目としての日本事情からの脱皮

発想の転換を図り、ボランティア活動（つまりインターフェースとして各種ボランティア活動、含む交流）ではなくインターフェースとしての授業のあり方を考える。

具体的に高知大学の取り組みは、大きく3つに分けることができる。1つは、共通教育

における日本事情の取り扱い方。2つ目は、専門教育としての日本事情の取り扱い方。そして3つ目に日本語教員養成課程の取り扱い方である。

1）共通教育における日本語・日本事情教育は、他大学のそれと基本的に同じである。日本語8単位が外国語との単位互換に適応され、日本事情科目8単位が一般教養科目（共通教育科目）の読み替えに適応されてきた。留学生にとって日本語は、第2外国語であるのが明白であるのでこれは良しとする。しかし、教育の国際化と同時に日本人学生のリカレント教育あるいはリメディアル教育を鑑みるとき、従来の留学生のための日本事情教育に新しい方向性を見出すことができる。

そこで、平成10年度には「日本事情」を「日本事情・異文化共有論」とし、留学生とともに日本人学生にも開放し、毎回与えられた課題を考えながら自然に異文化に気づき、親しみ、理解することを目的とした。そして討論や共同作業を通して共通の経験を分かち合えるクラス運営を試みた。

結果は良好で、留学生15人、日本人学生15人という限定クラスであったが聴講生4人を含む34人全員が、一度も休まず楽しみに授業に参加したという結果からしても、学生のニーズの大きさに驚かされた。それらの結果を受けて、平成11年度には日本事情が取れ、主題別科目としての「異文化共有論」が開講された。上記30名の小人数クラスという限定にもかかわらず、320名の受講希望登録が有りうれしく感じると同時に戸惑いは隠せない。(平成12年度受講希望者は、369人であった。)

2）高知大学では、人文学部国際社会コミュニケーション学科の専門教育科目としても外国人留学生用に日本語・日本事情科目を開設している。これは専門課程に進んだ留学生が日本語で論文を書くのに必要な能力を身につけるための4年一環教育を前提にして提供されている。コマ数は、日本語が8単位、日本事情がやはり8単位である。

日本語能力試験1級に合格し、共通教育でさらに日本語・日本事情を学んだ留学生の専門課程における日本語・日本事情は、かなりレベル的に高度なものが可能である。そこで平成10年度の学科改組に合わせ、専門課程の日本事情8単位中6単位を留学生用科目という縛りから解放し、「日本社会論」、「日本文化論」、「日本社会論特講」、「日本文化論特講」（集中講義）とし、日本人学生との合同授業を行っている。これらの科目は留学生特例を申請している学生にとっては必修である。従って構成メンバーの約半数は、自動的に留学生となり期待したクラス運営を可能にしている。

3）学科改組時に行った、もう一つの試みが「日本語教員養成課程」の新設であった。

国際コミュニケーションを学ぶ学生の多くは、言語やその言語の使用される国や文化について非常に興味を持っており、他言語や他文化との接触から自文化への目覚めが著しく、正しい日本語および日本文化にたいしても知的好奇心が大きく、日本語教育や日本語教師として職を希望する学生が年々増加している。そこで上記2）で誕生し

た科目を、日本語教員養成課程の選択や選択必修として抱き合わせることにより、留学生と日本人学生双方の学習意欲の向上と目的意識の明確さを図っている。（日本人学生のみならず留学生も指定された課程科目をすべて修得すれば、高知大学にて日本語教員副専攻課程単位修了証が得られる。）尚、日本語教員養成課程の必修科目としては、「外国語としての日本語」、「日本語教授法」、「情報処理１」、「日本語技法」などがある。

３－４　国際化と経験の共有を考慮した授業内容

さて、**「異文化共有論」**（共通教育）においては、対象が外国人留学生と日本人学生の１回生から４回生までで、しかも学部も４学部生が入り混じる幅広い受講者層である。学年・学部・国籍を超えた教材（ここではたたき台となりうるもの）が必要であった。そこで１回分を５つの部分から構成してみた。

Part 1 ：問題提示と発送や習慣の違いを発見

例：色に対する５択問題

1）太陽の色といえば　（①赤　②黄　③白　④オレンジ　⑤その他）
2）水の色といえば　（①青　②緑　③白　④茶　⑤その他）
3）学校の色といえば　（①白　②ピンク　③黄　④赤　⑤その他）
4）空の色といえば　（①青　②オレンジ　③白　④灰　⑤その他）
5）セックスの色は　（①黄　②青　③ピンク　④黒　⑤その他）

日本人にはそんな馬鹿なと思う人がいるかも知れないが、これはあくまで話題提供のための問題提示なのである。実際、後述するが結果は（民族的概念の相違や、同じ国民の中にも先入観、男女差、年齢差などがみうけられ）非常に興味深いものであった。

Part 2 ：コラム

例：日米文化の違いが綴られた文章を題材に、そのような結果が導かれた原因を各自が追跡する。（適当な内容と分量の文章を読んで、異文化のギャップについて考える。）

また、その内容に準じた課題作文を出し、問題提示に対する理解度と文章による表現力チェックを目的とする。

Part 3 ：クイズ

（ここには、3つのバリエーションを用意している。一つは、クイズ。二つ目は、ゲーム。三つ目にディベート。）

例：1）道にお金が落ちていました。あなたならどうしますか？
（①警察に持っていく　②もらう　③そのままにしておく

④わからない程度もらう　　⑤その他　　)

2) 引越しをしました。隣人とどんなコンタクトを取りますか。

(①手土産を持っていく　　②挨拶に行く　　③何もしない

④相手がくるのを待っている　　⑤その他　　)

など

Part 4：今日の一言

例：目指せマージナルマン

(特にその課のコラムと関係の深い一言を提示し、印象力の強化と定着を図ることを目的としている。)

Part 5：学習の記録（今日の感想）

例：1) 今日の授業で一番印象的だったことを書きなさい

2) 今日の授業（異文化体験学習）から学んだことがあれば書きなさい。

3) 今日あなたが行った異文化共有あるいは体験があれば書きなさい

4) その他（感想、落書き、教師への一言など）

終わりの5分を利用して、学習記録を記入させ、必ず来週の授業にフィードバックさせることを目的にする。

「日本文化論」の場合

「日本文化論」（人文学部、国際社会コミュニケーション学科の専門教育科目）の場合は、共通教育で「異文化共有論」を学んだ人にも、そこでは学んでこなかった人にも対応できるように異文化体験型授業を提供している。構成メンバーも「異文化共有論」よりは、コミュニケーションを専攻する学生に限定されている点でファクターが異なる。

異文化体験型授業の内容としては、次のような異文化適応教育トレーニングの手法を用い、授業や講義体というよりは、サバイバルゲームや擬似国連代表者会議のような状況設定を中心におこなっている。

例：あなたなら誰を選ぶ

(参加者を偶数のグループに分ける。

10人の外国人、もちろん日本人を含んでも良い、の簡単なプロフィールを紹介する。

(次のページにサンプルシート有り。)

各グループで、隣人になっても良い条件を吟味し、その人から、いやな人まで話し合いながら順位をつける。

次に決定し終わったグループ同士で討論しながら、今度は新しいメンバー全員で納得のできる一つの結果を導く。

このとき当然、両者とも最初の案と変わることが予想されるが、そこで納得のいく

議論がなされることが重要である。

このように、次から次へとグループが集約され、その度に意見の違いや発想、先入観、自己の発見を繰り返しながら最終的にはクラス全員で協議し、最終案を導き出すゲーム。

最終的に自分の偏見や固定概念に気づき、話し合いでそれを修正したり説得できるかを経験するのが目的である。

上記の例からもわかるように、「日本文化論」においては、できるだけ各人を今までの適応範囲からはずすことにこころがけ、既成の概念や葛藤により、新しい水準の獲得を目指すものである。

ーあなたなら誰を選ぶー

Aさん

日系ブラジル人のAさんは、日系3世です。日本の言葉は日系2世の両親と1世の祖父母からいろいろ聞かされて育ちました。日本では電機メーカー工場で働くことになっています。

Bさん

Bさんは違法入国のイラン人です。現在は、無職です。毎日、日雇いの仕事を探して、それで何とか生活をしています。日本語は片言しかしゃべれないのですが、ぜひ日本に永住したいと考えています。

Cさん

Cさんは中国北京大学の大学院生です。日本には東京大学に留学するためにやってきました。日本語は大学で勉強してきたので、学校の授業も問題ありません。
Cさんはお料理が大好きで、特に北京料理が得意です。

Dさん

韓国から来日したDさんは、韓国と日本企業との合弁会社に勤務しています。現在は日本支社に派遣されてきています。今後数年は日本勤務になる予定なので、目下会社で日本語を特訓中です。
日本には奥さんと子供たちときています。

Eさん

南アフリカ共和国から来たEさんは、日本の薬品会社で研修を受けています。日本語は母国で勉強してきているので、日常生活には困りません。奥さんと子供たちも一緒に日本に来ています。

Fさん

米国系証券会社のFさんは東京支店に派遣されて来日しました。Fさんはハーバード大学でMBA（経営学修士号）を修得している、エリート社員です。
独身のFさんは、自宅に仲間を呼んでパーティーをするのが大好きです。

Gさん

サウジアラビアからやって来たGさんは石油会社に勤務しています。今回は奥さんと子供も一緒に日本に来ました。日本にはもう何度か来ているので、日本語の日常会話には困りません。Gさん一家は熱心なイスラム教信者です。

Hさん

Hさんは自動車整備工場で働いているベトナムの難民です。日本語は日本に来てから学びました。今は何とか日常会話はできるようになりました。Hさんは、将来、母国で待っている両親と兄弟を日本に呼びたいと考えています。

Iさん

Iさんはエンジニアです。ドイツから来日しました。現在は日本のコンピューター会社で研修を受けています。
ドイツでは日本語は勉強してきましたが、まだ十分ではないようです。Iさんは独身です。趣味はパソコンです。

Jさん

ロシアからの留学生のJさんは、現在日本語学校に通っています。将来は、日本の大学に進学して、日本とロシアの架け橋としての役割を果たせるようになりたいと思っています。

＜資料　joca.or.jpより＞

4　成果と問題点

3－4で述べた「異文化共有論」に対するデータをご覧いただきたい。紙面の都合上、Part 1の1）と5）についてのみ言及しておきたい。

まず太陽の色は基本的に赤とｵﾚﾝｼﾞと黄が仲良く分かち合っているようである。陳腐な表現だが、小学生時代に「太陽は赤」だと教えられた人がいたら気の毒としか言いようがない。しかし、その太陽の色を男女差で見てみると男性の平均的分布（しいて言うならｵﾚﾝｼﾞ感が少ない）に対し、女性はｵﾚﾝｼﾞ感がむしろ一番多い結果がみうけられ、男性の一番多い黄色感が女性では一番少ない（これと男性には赤色色弱があるということとも関係するしないは未決)。

また、それを国籍別に見てみると日本人と中国人では、明らかに太陽（色）感に隔たりのあることが理解できる。

同様にPart 1の5）についても、全体的にはセックスはピンクに代表されるが、黒と答えているパーセンテージの多さも見逃せない。

また国籍別に見ても、日本人にはピンク映画、ピンサロ的イメージが大きいのに対し、中国ではむしろ一人っ子政策などの影響か黄色と黒が、日本人のピンクの占める割合に匹敵している。(ちなみに中国語では「黄色人」で日本人とスケベをあらわすらしい。)

このように参加人数と国籍、年齢、知識や環境、あるいは宗教や性別により毎回データが異なるのでその辺は、参加者に合わせて過去のデータなどの紹介も必要になる。

また、学生同士の刺激の与え合う度合いが満足度に結びつくようクラス運営に心がけなければならない点は非常に厄介である。

専門教育は人数的にはまとまりが付き易いが、共通教育においては当局の多大な協力なくては小人数でしかもできるだけバリエーションあるメンバー選択（構成）は成立しない。

5　まとめ

「教育の国際化」は、新しい物ではなく、従来よりずっと暖めてきたものの中に有る。

しかし、発想の転換は大いに必要であろう。その一つに、本来留学生用科目として定着している「日本語・日本事情」教育が有る。また、それをインターフェースとして授業本体に使用することにより、今まで見落とされてきた留学生と日本人学生を着実に結ぶ手段と、互いの異文化理解に貢献するだけでなく、もう一歩踏み込んだ多文化共生の創造が期待できるのではないかという期待とわずかではあるが実感を得られたことが幸いである。

1）太陽の色と言えば（性別）

赤	黄	白	オレンジ	その他
9	8	1	9	0

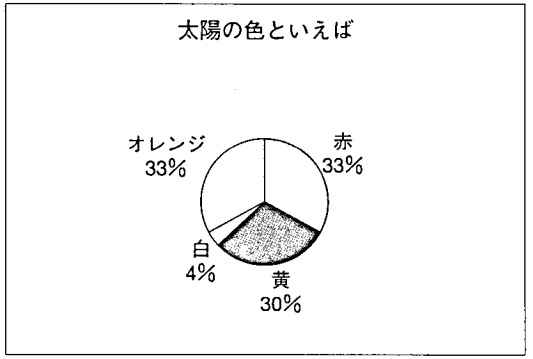


図 a

1）太陽の色と言えば

	赤	黄	白	オレンジ	その他
男	5	5	0	4	0
	赤	黄	白	オレンジ	その他
女	4	3	1	5	0

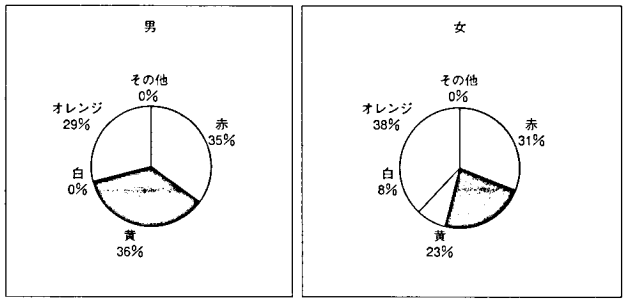


図 b

1）太陽の色と言えば（国別）

	赤	黄	白	オレンジ
日本	1	5	1	5

	赤	黄	白	オレンジ
中国	8	1	9	0

	赤	黄	白	オレンジ
オーストラリア	0	2	0	0

	赤	黄	白	オレンジ
不明	4	0	0	2

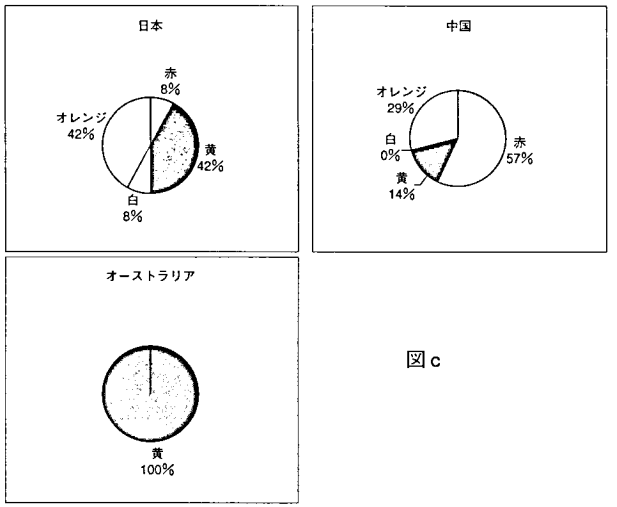
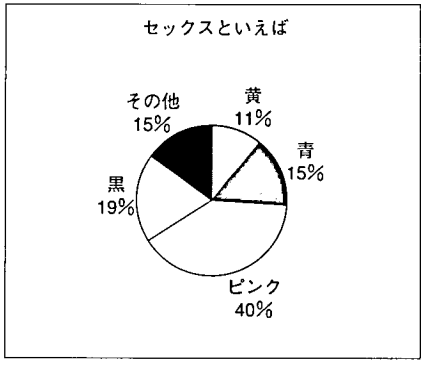


図 c

5) セックスと言えば

黄	青	ピンク	黒	その他
3	4	11	5	4

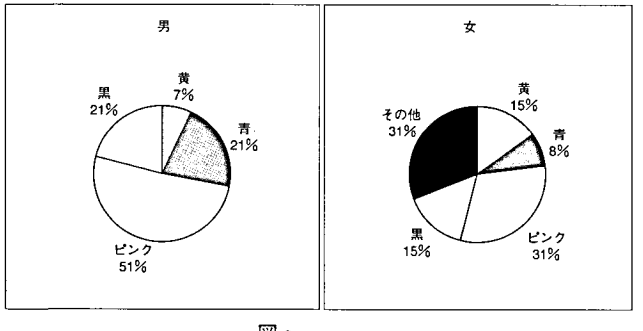
その他
赤　1人



図d

5) セックスと言えば（性別）

	黄	青	ピンク	黒	その他
男	1	3	7	3	0
	黄	青	ピンク	黒	その他
女	2	1	4	2	4



図e

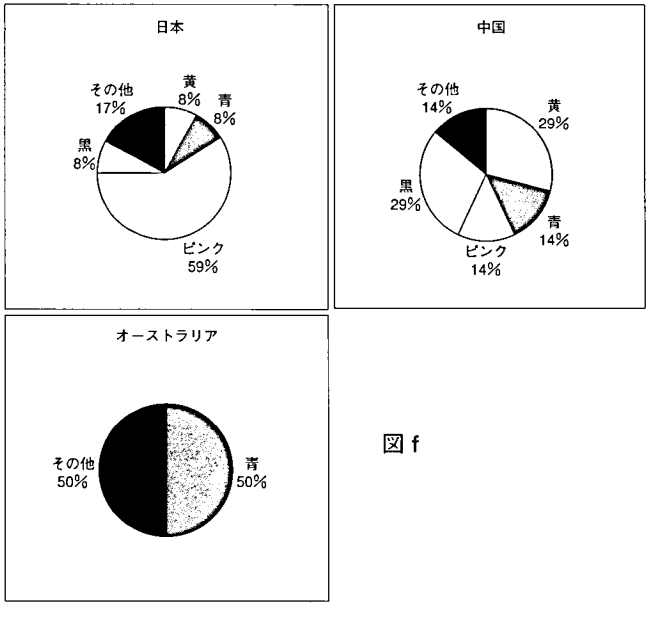
5) セックスと言えば（国籍別）

	黄	青	ピンク	黒	黒
日本	1	1	7	1	2

	黄	青	ピンク	黒	黒
中国	2	1	1	2	1

	黄	青	ピンク	黒	黒
オーストラリア	0	1	0	0	1

	黄	青	ピンク	黒	黒
不明	0	1	3	2	0



図f

注1　ある物とある物をつなぐ場合に必要な装置、手順、接続技術のこと。またそのためのルールのこと。例えば、コンピュータと周辺機器を接続する場合、接続方法が異なると上手くつながらないためインターフェースの規格化、標準化を行うという。

ここでは、外国人留学生と日本人学生をつなぐものの意味。つまり異文化理解や多文化共生のための共有すべきコンセプトを意味している。

2　日本人学生の多くは、例えばメモリーいっぱい登録した電話番号の相手を友達と考えているが、留学生の友達意識は、もっとシビアで現実的である。

参考文献（論文含む）

石附実　現代日本の教育の国際化　福村出版　1990

井門富二夫　大学のカリキュラムと学際化　玉川大学　1991

奥村訓代　異文化理解における日本語教育の役割　長崎大学教養部30周年記念論集　1995

他文化理解教育から多文化共生教育への橋渡しとしての「日本事情」教育についての一考察　高知大学学術研究報告46　1997

本格的な短期留学生受け入れに向けて　高知大学人文科学研究6　1998

喜多村和之　大学教育の国際化　玉川大学　1989

西村俊一　国際的学力の探求　創友社　1989

長谷川恒夫他　外国人留学生のための「日本事情」教育のあり方についての基礎的調査・研究　'92・93年度科研研究成果報告書　1994

箕浦康子　日本人学生と留学生（留学交流1）　ぎょうせい　2000

脇田里子　多文化クラスにおける日本人学生と留学生の交流　ぎょうせい　2000